様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２３ 日現在

機関番号：３４４３４
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３７２０２７３

研究課題名（和文）論理的文章作成のための「連文型」の研究

研究課題名（英文）Linked Sentence-Patterns (Renbunkei) for Creation of Logical Texts.

研究代表者
宮澤　太聡（MIYAZAWA, Takaaki）

大阪観光大学・国際交流学部・講師

研究者番号：９０５７９１６１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,900,000円、（間接経費）　570,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本語学習者が論理的な文章を作成する際の「つながりの悪さ」と「まとまりの悪さ」の解決を目指した。まず、日本語学習者の作成した論理的文章を対象として問題点の分析をし、特に、接続表現と文末形式の使い方に問題があることを明らかにした。そして、論理的な新書の文章15編の分析を通して、結論を述べるための接続表現と文末形式の組み合わせによる「連文型」を分析した。その結果、ある話題のまとまりの終わりに特定の連文型が現れる傾向が示された。また、「〈一般論による話題の開始〉。しかし、〈意外な結論〉のである。例えば、〈結論の根拠となる具体例〉。」のように、まとまりの中間に結論が現れる連文型も分析された。

研究成果の概要（英文）：This study aims to solve the problems of "poor linking" and "poor coherence" encountered when learners of Japanese write logical texts. Firstly, through an analysis of the problems encountered in logical texts by learners of Japanese, the author shows that problems are especially common in the usage of conjunctive expressions and sentence-final forms. Next, through an analysis of fifteen logical texts from Japanese small-format paperback non-fiction books, the author analyses linked sentence-patterns (renbunkei), which consist of combinations of conjunctive expressions and sentence-final forms, and which are used to announce conclusions. As a result, it is shown that there is a tendency for specific linking sentence-patterns to appear at the end of the final summary of the topic. Furthermore, the author has also analysed linked sentence-patterns whereby the conclusion emerges from the final summary.

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：日本語教育

キーワード：連文型　論理的文章作成　接続表現　文末叙述表現

１．研究開始当初の背景

本研究は、論理的な文章を作成するための「連文型」を分析することを目的としている。これまで、日本語教育の作文教育では、①論理的文章を作成するための表現集の開発、②論理的文章の構成の分析（「課題の提示」「具体例の提示」「結論の提示」等の意味的・抽象的な単位）が進められてきた。いずれも日本語学習者が論理的文章を作成する際に有益であると考えられるが、これらを総合的に扱った研究は十分だとはいえないと考えられる。

日本語学習者が文章を作成する際、文章の構成（どんな内容をどのような順番で書こうかといった意味的・抽象的な単位）が重要であるが、その構成が表現集の記述のように、「言語形態的指標」によって支えられていなければ、ぶつぶつと途切れた文の羅列となってしまう可能性がある。つまり、「つながり」と「まとまり」を明示し、文章を構造化する表現の習得が必要となる。文章の「構造化」を学習者に定着させるためには、一文単位の意味と形式をつなぐ「文型」を超えた、複数の文で表現される「連文型」の学習が必要であると考えられる。

２．研究の目的

今後さらに増加することが予想される学部留学生の中でも、日本語のレベルが上級であるにもかかわらず、レポートを書く際、文と文とがぶつぶつと途切れた文章を書くことが少なくない。文と文とが意味的に関連するというだけでは、「文章」は成立しない。そのため、文と文との「つながり（連鎖・連接）」「まとまり（統括）」を意識した文章作成の指導が必要になる。これまで、「文型」教育であまり取り上げられることのなかった「接続表現」を中心に、「提題・叙述表現」等との共起関係を分析することで、「文型」を超えた 2 文・3 文、それ以上を射程とした「連文型」を明らかにし、学習者の文章作成の際の指導に役立てることを目的とした。

３．研究の方法

(1) 上級日本語学習者が文章作成の際に抱えるつながり・まとまりの悪さの分析

① 日本語上級の学習者（全て中国籍）を対象に、論理的な文章を読解させ、元の文章の論理がわかるように要約文を作成させた。

まず、必要な情報を取捨選択できているか（論理をたどることができているか）の分析を行い、その後、抜き出した情報同士の関係を明示するために、接続表現と文末形式が適切に使用されているかを分析し、学習者に共通する文章の構造化に関わる言語形態的指標の使用の困難点を明らかにした。

② 上記①と同様の実際にレポートを作成する機会のある上級日本語学習者の論説文を対象として、自身が実際に作成中のレポートを課題として提出させ、特に、接続表現と文末形式を「形態的指標」として「文段」の分析をし、学習者が適切に使用できているかどうか分析し、その困難点を明らかにした。

(2) 論説文の「文段」における「形態的指標」の分析

大学の学問的入門書としても利用できる新書 15 編を対象として、文字化データを作成し、「文の連接関係」に従い、「統括関係」から、「文段」を認定した。その際、接続表現と文末形式との共起関係を分析し、「中心文」（統括文）、と統括される文の表現類型を整理し、「連文型」を明らかにした。

(3) (1)、(2)の分析を通して、ある話題のま

とまりの中で「結論」を述べるための連文型を明らかにした。

４．研究成果

(1) 学習者の要約文・レポートに見られる接続表現と文末形式の使用の問題点

大学に在籍する学部・大学院留学生 40 名（全て中国籍）を対象として、要約文とレポートを作成させた結果、特に、接続表現と文末形式に問題が集中しており、「結論」とその他の文との関係がわかりにくいという結果が得られた。

(2) 新書の文章の「結論」を述べる「連文型」は、以下のものが典型的なものとして分析された。文末形式としては、「～のである。」によって結論が述べられることが多かったので、ここでは、文末形式「～のである。」を中心に「連文型」を列挙する。

①ある話題のまとまりの終わりに「結論」が現れるもの（尾括型の段型）

・過去の事例を記述し、要点をまとめる。

「〈過去の事例〉。つまり、〈事例の言い換え〉{のである／ということである}。」

・一般的な事例を記述し、筆者の見解によってまとめる。

「〈一般的な事例〉。{つまり／すなわち／ようするに}、〈事例に対する見解〉のである。」

以下の 2 例は、結論が話題のまとまりの最初にも現れており、「両括型」として考えることも可能であるが、話題の終わりに再提示された結論のほうが、より詳細に述べられていることが多いため、「尾括型」とした。

・すでに述べた結論を再提示することでまとめる。（順接的）

「〈結論〉。〈具体例〉。{したがって／だから}、〈結論の再提示〉のである。」

（この場合、「具体例＋したがって、～のである。」が、結論に対する〈根拠〉を表す「文段」となり、「文段」の多重構造が成立している。）

・すでに述べた論を再提示することでまとめる。（逆接的）

「〈結論〉。たしかに、〈一般的な論の説明〉。しかし、〈先行文の論とは異なる結論の再提示〉のである。」

②ある話題のまとまりの中間に「結論」が現れるもの（中括型の段型）

・一般的な論に対して意外な結論を述べ、原因・理由によって根拠を示す。

「〈一般的な論の説明〉。しかし、〈意外な結論〉のである。{というのは／なぜなら}〈根拠〉からである。」

・一般的な論に対して意外な結論を述べ、具体例によって根拠を示す。

「〈一般的な論の説明〉。しかし、〈意外な結論〉のである。{例えば}〈事例による根拠〉{のである／からである}。」

③ある話題のまとまりの始めに「結論」が現れるもの（頭括型の段型）

・唐突に結論を述べることで話題を開始し、原因・理由によって根拠を示す。

「実は、〈結論〉のである。{なぜなら／というのは}〈根拠〉からである。」

・唐突に結論を述べることで話題を開始し、具体例によって根拠を示す。

「実は、〈結論〉のである。例えば、〈根拠〉のである。」

・先行する話題のまとまりに対して、に意外な結論を述べ、具体例によって根拠を示す。

「しかし、〈意外な結論〉のである。というのは、根拠」のである。」

論理的文章では、「結論」が話題のまとまりのどこに現れるかによって、根拠の述べ方も変化することがわかり、「同列型」の接続表現「例えば」が、結論の根拠として、「なぜなら」のような「補足型」の接続表現と似た振る舞いをすることが明らかになった。

本研究は、日本語学習者の要約文とレポートに見られた「つながり」と「まとまり」の悪さの一因である言語形式の「接続表現」と「文末形式」の問題点を克服することを目的に、論理的な文章作成のため連文型を明らかにした。しかし、連文型は、接続表現と文末表現だけで成り立っているわけではない。例えば、結論を述べる文型には、「このように」に代表される「指示表現」が多く観察された。今後は、指示表現を含めた「連文型」の記述を目指していきたい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

1.宮澤太聡（2014）「統括機能から見た文末叙述表現『のダ』・『んダ』の異同」『大阪観光大学紀要』第 14 号，大阪観光大学，15－24 頁.査読無，http://library.tourism.ac.jp/No14miyazawatakaaki.PDF

〔学会発表〕（計 3 件）

(1) 宮澤太聡（2011）「文章と談話におけるノダの文脈展開方法の異同」（口頭発表）,日本語学会秋季大会,2011年10月22日,於・高知大学

(2) 宮澤太聡（2012）「新書の文章における文末叙述表現と接続表現の共起関係」（口頭発表）,韓国日本学会,2012年2月4日,於・同徳大学

(3) 宮澤太聡（2012）「論理的な文脈を支える連文型について」（口頭発表）,日本語教育国際研究大会,2012年8月18日，於・名古屋大学（名古屋）

６．研究組織

(1)研究代表者

宮澤　太聡（MIYAZAWA　Takaaki）
大阪観光大学　国際交流学部　講師
研究者番号：90579161